英会話道場イングリッシュヒルズ
基礎教材

エレガント英語への道　Ⅳ

生井利幸

「繊細に英語を感じる」という実体的経験を積み重ね、
**　徐々に「エレガント英語」を習得する**

英語を「暗記学習」で学ぶ、・・・イギリスやアメリカにおける通常の生活シーンを“舞台”とする「一般の人々によって話されている日常会話英語」についての“一時的暗記”を目的とする学習であればこれで十分でしょう。

受講生の皆さん、まず第一に、1)「学習」(to learn)、及び、2)「習得」(to master)の相違についてしっかりと認識・理解してください。

暗記学習は、一定の範囲内において、いわゆる日常会話英語の「“一時的”学習」（一時的暗記）としての役割は果たします。しかし、残念ですが、一時的な暗記による“機械的”学習方法では日常会話英語の「習得」は到底不可能である、と言わざるを得ません。

本稿において、これら２つの概念、即ち、

1)「日常会話英語の『学習』」
　　と
2)「日常会話英語の『習得』」

は、それぞれ“相当異なる概念”であることに留意してください。言うまでもなく、学習

は、「学ぶこと」「学んでいる様相」等を意味します。一方、習得は、「自分のものとすること」、「吸収・同化し、自分自身の教養・文化の一部と化すること」、「自分自身の血(blood)・肉(bones)・骨(flesh)と化すること」を意味する概念です。

当教室は、「国際レヴェルのエレガント英語」を“習得”するためのレッスンを行う教室です。国際舞台で通用するエレガント英語を習得するには、単に「忘れ難い印象」を積み重ねるだけでなく、英語を「さらに繊細に感じる」という実体的経験が必要となります。このことについて“本質論”として厳密に述べると、

1)「『感じる』(to feel something)」
　　ということと、
2)「“『繊細に”感じる』(to “delicately” feel something)」

ということは、それぞれ異なる概念である、と明言することができます。

受講生が習得を目指す「エレガント英語」を“繊細に”感じるためには、受講生自身が、さらに「“繊細に”感じる能力」を養い、『エレガント英語の“繊細さ”』(“delicacy” of elegant English)を「“繊細に”感じる」ことが極めて重要です。

エレガント英語を繊細に感じるためには、“単なるリスニング学習”として、何も書かずに（何もメモすることなく）エレガント英語を聞くだけでは、その習得は、“実にお話にならないほど”不可能と言わざるを得ません。

エレガント英語を繊細に感じる方法として最も妥当な学習方法は、ボイスレコーダーを使って講師が行うレッスンを録音し、レッスンの後に「レッスン内容の復習を目的として、たっぷりと時間をかけて丁寧にディクテーションを行う」という学習方法です（レッスンにおいてボイスレコーダーを使用するには、事前に「講師の許可」が必要です)。

“dictation”は、いわゆる「書き取り」を意味する学習行為を指します。エレガント英語の習得を実現する上で最も妥当な学習方法は、単に、楽な方法でエレガント英語を聞くだけでなく、“汗”と“涙”を介して、「エレガント英語を聞きながら、その一語一語についてしっかりとノートに書き取る」という実体的経験を積み重ねていくことが必要不可欠です。

聞きながらノートに書き取るという学習方法は、実際、「相当なる時間・エネルギー」が必要となります。ディクテーションを行うそのプロセスにおいて投入される「相当なる時間・エネルギー」、・・・この「相当なる時間・エネルギー」を投入するその行為の中に、エレ

ガント英語を「自分の言語」とする上での“実体的手続き”(substantial procedure)が内在しています。

上記の“実体的手続き”の価値を認識・理解し、この実体的手続きの中に存する「尊厳性」(dignity)についてしっかりと認識・理解した受講生のみが、実に、講師である生井利幸の厳格指導の下、地球に存する一個の人間として、「人類」(humankind)という立ち位置から、「真の意味でのエレガント英語」を習得するための道のりを歩むことができます。

受講生の皆さん、今再び、1)「英語を感じる」という概念と、2)「“繊細に”英語を感じる」という概念の相違について再考してください。前者と後者は、一見すると“些細な相違”(subtle difference)として捉えられがちですが、実のところ、前者と後者における関係性には、実に「巨大な相違」(immense difference)が存在します。

「この巨大な相違とは一体どのような相違であるのか」・・・この問題を解明することを目指す学習経験は、当・英会話道場イングリッシュヒルズにおいてのみ経験することができる「極めて本質的な学習経験」であると言えます。

“To delicately feel the things in your daily life is a prerequisite to gradually learn and master elegant English.”

English is a delicate language. In other words, English is the “very language of delicacy.” Therefore, you need to be delicate enough to feel such delicacy English possesses internally.

Now, I’d like you to recognize and understand that “to just feel something” is different from “to delicately feel something.” What you are feeling is actually different from what other people are feeling in them.

It is said that “Beauty is in the eye of the beholder” in the countries civilized. I’d like you to reasonably attempt the following hypothesis. If there are ten people in front of you, obviously, there are surely ten different feelings in front of you. This means that people feel different things in front of the same object individually.

Hence, what you feel would be a “very decisive bifurcation” for the following matter, whether you deeply grasp the teaching given in the lesson or not reasonably. This matter surely changes the quality and direction of your study.

I’d like you to delicately feel the words, phrases and sentences spoken by the instructor in the lessons at all times. If you feel those delicately, your study would be very successful in the future absolutely.

I finally write the important matter for your sake again. To delicately feel the things in your daily life is a prerequisite to gradually learn and master elegant English. Learning and mastering elegant English is a just matter of delicacy itself.

[補足]

・・・受講生におけるエレガント英語の理解のために

全世界における諸々の文明社会に存在する「世界レヴェルの教養・見識を備えたエレガント英語スピーカー」（その実数は極めて少ない）においては、通常の場合、彼（彼女）が英語を喋るとき、いわゆる「スラング」（俗語）を使うことはありません。

講師の生井利幸は、日本国籍の英語スピーカーとしては、この国で最も多くの英語スラングを知っている英語スピーカーでしょう。しかし、生井利幸は、受講生に対する教室のレッスンにおいて、一切、“ほんの一言さえ”も、英語スラングを使うことはありません。

その理由は、実に明確です。生井利幸が行う教室のレッスンは、「品格・品位のあるエレガント英語のみ」を教授する“厳格性極まりないレッスン”であるからです。

公式の会議・レセプション・パーティー等において、「世界レヴェルの教養人・見識者」と接するとき、あなたが英語スラングを使うと、あなた自身が「自己の品格・品位」を大きく落とすことになります。また、同時に、スラングの使用による“非理性的”発言は、あなたの目の前に存在する相手に対して「失礼」「無礼」を与える行為にもなります。

講師は常に、一事が万事において、受講生自身がいつ何時においても「世界に通用するエレガント英語」を喋ることができるよう、まさに、「最高、且つ、細心の注意」を払いながらエレガント英語の教授を行っています。